

# 夕焼けがうすれて

小川未明

青空文庫



汽笛きてきが鳴なつて、工場こうじょうの門もんをでるころには、日ひは西にしの山やまへ入はいるのであります。ふと、達夫たつおは歩あるきながら、

「僕ぼくのお父とうさんは、もう帰かえつてこないのだ。」と、頭あたまにこんなことが思おもい浮うかぶと、いつしかみんなからおくれて、自分じぶんは、ひとりぼんやりと、橋はしの上うへに立たつていました。

もはや通とおる人もありませぬ。水みずは海うみの方ほうへ向むかつて流ながれています。広こう告こく燈とうの赤あかい光ひかりが、川かわ水みずのおもてに映うつつていました。

「いつか、お父とうさんに海うみへつれていつてもらつた。帰かえりは、暗くらくなつた。そして、電でん車しゃの窓まどから、あの広こう告こく燈とうが見みえたつけ、あのときは楽たのしかつたなあ。」

学がく生せい服ふくを着きた少しょう年ねんの目めから、熱あつい涙なみだがながれました。つねに彼かれはほがらかだつたのです。お父とうさんは、お国くにのために戦たたかつて、死しんだのだ。そして英えい霊れいは永えい久きゅうに生いきていて、自分じぶんたちを見守みまもつていてくださるのだ。だからさびしくないと信しんじていたのです。しかるに、どうしたのか、今日きょうは、ばかにお父とうさんのことが思おもい出だされてなつかしかつたのです。

「もし、生いきていらして、あの小こ山やまくんのお父とうさんみたいに、凱がい旋せんなさつたらなあ。」

と、考えると、思っただけで、飛びたつような気がしました。

ちようど、このとき、灰色の影が、銃をかついで、あちらから橋を渡って、足音をたてずに、きかかりました。

「あつ、お父さんでないか。」

達夫は、目をみはりました。たとい、幽霊でも、お父さんだつたら抱きつこうと待っている、それは、釣りざおをかついで、どこかの人がつかれた足を引きずりながらくるのでした。

「駅へは、まだ遠うございますか。」と、その人が、たずねました。

「この町をまつすぐにいつて、つき当たるとじきです。」と、達夫は、おしえました。

ぶどう色に空は暮れて、ボーウと、サイレンが鳴りひびきました。これから、工場では、夜業がはじまるのです。

「非常時のことで、仕事が忙しくなりました。体が強健で、希望の方は、奮つて居残つてもらいたい。」と工場長のいった言葉が、達夫の耳に、はつきりとよみがえりました。

同時に、彼は、戦時日本の勇敢な少年工であつたのです。急に、彼の足には力

が入ったし、両方の腕は、堅くなりました。町へ入ると、ラジオの愛馬進軍歌がきこえてきました。彼は、いつものごとくほがらからで、口笛をそれに合わせて、家に帰るべく駅の方へ歩いていました。

「ああ、おそくなつた。」

電車に乗つて、腰を下ろすと、ひとり言をしました。外は暗くなって、ただ町の燈火が星のように、きらきらしているばかりです。彼は、いつも帰る時分に、晴れた空にくつきりと浮かび出た、国境の山々の姿を見るのが、なによりの楽しみだったのです。人のめつたにいかない清浄な山の頂や、そこに生えて、風に吹かかれている林の景色などを考えるだけでも、一日の疲れを忘れるような気がしました。そして、お父さんの靈魂は、きつとあんなような清らかなところに住んでいらつしやるのだらうと思つたのでした。それが、もうおそくなつて、山が見えないのは残念です。

じつと、燈火を見ているうちに、家で自分の帰るのを待つているお母さんの姿が浮かびました。

「そうだ、僕は強くなるのだ。そして、お母さんの力にならなければ。」

彼は、きつとして、頭を上げました。

その翌日の晩のことです。

お母さんは、夕飯の用意をして、おなかをすかして帰ってくる息子を待つていられた。自分にはなくても、子供には、べつに滋養になりそうなお着がつかっています。

「どうしたんでしようね。いつも、いまごろは帰ってくるのに。」と、お母さんは、時計を見上げていられました。どうしたのか、達夫は、いつになく帰りがおそかったのです。

「お母さん。おそくなつても、心配しないでいいよ。」と、出がけにいった、わが子の言葉が思い出されました。けれど、帰る時刻のきまつているのに、こうおそいはずがない。なにかまちがいがあったのでなければいいがと、お母さんは心配しました。

「機械にふれて、けがをしたのではないかしらん。」

あれほど、気をつけるようにと、日ごろいつているけれど、どんなことで、あやまちがないともかぎらない。会社へ電話をかけてみようか、電話の番号をよくきいておけばよかつたと、お母さんは、気をもんでいられました。

そのうちにも、時計の針はこくこくとたつていったのです。いつも帰る時間より一時間、二時間、二時間半と過ぎてしまったのです。

「あの子にかぎって、だまつて、ほかへ遊びに行くようなことはない。」

そう思うと、お母さんは、こうして、じっとしていることができませんでした。暗い道を、お母さんは、停車場の方へ向かって歩いていました。おそらく、途中で息子に出あうであろうと思われるので、あちらから、足音がすると、立ち止まって、その人の近づくのを待っていました。見ると、ちがっています。またすこしいくと、こちらへくるくつ音がしました。

「あの足音こそ、たしかに達夫のようだ。」

お母さんは、闇をすかして、見のがすまいとしました。ちょうど、年ごろから、脊の高さまで、そっくり同じかつたので、

「達夫じゃない？」と、お母さんは、声をかけました。しかし、ちがっていたとみえて、その少年は、だまっていつてしまいました。道の曲がり角に、肉屋があつて、燈火が明るく往來へさしています。お母さんは、しばらくそこに立っていました。あとから、あとから、勤めから帰るらしい人影が、前を過ぎていきました。

「まだ、こうして、みなさんが、お帰りなさるのも、そんなに心配することはない。お母さんは、みずから、気持ちをしめようと思いました。けれども、こうしてみなさんが家へ急いで帰られるのに、いつも早く帰る我が子が、どこにどうしているだろうと思う

と、またしても氣をもまずにはいられなかつたのであります。お母さんは、とうとう、駅の前までできてしまいました。

ゴウ、ゴウ、と、ひびきをたて、電車がホームへ入ると、まもなく、どやどやと階段を降りて、人々が先を争って、改札口から外へ出てきました。中には、大人にまじって、達夫ぐらいの少年もありました。片手に弁当箱と書物を抱え、片手にこもりを握っていました。お母さんは、そのようすつきを見ると、我が子の姿を思い出して、なんとなくいじらしくなつて、あつい涙がしらずにわいてくるのです。

まだ、自分の子だけが、帰ってきませんでした。お母さんの胸は、早鐘を打つように、どきどきとしました。そして、改札口のところまできて、階段を見上げて、いまか、いまかと待つていました。もう勤めから帰る人は、たいてい帰つたとみえて、その姿は絶えてしまいました。そして、電車の着くたびに降りるものは、活動を見た帰りのものか、盛り場で酒を飲んできて、酔っぱらっているような人たちでありました。その人たちの数もだんだん少なくなつて、お母さんは、悲しくなつてきました。

「きよう、電車に、なにか故障でもなかつたでしょうか。」と、たまらなくなつて、お母さんは駅員にたずねました。



「さあ、べつになかったようですが。」と、**駅員**は**簡単**に答えました。

やがて時計が、十一時半になろうとしたときです。ゴウ、ゴウといって新たに**電車**がつくと、まもなく人々が、ぼらぼらと**階段**へ降りてきました。そのなかに、**肩**をそびやかにして、**胸**を張り、**元気**な歩きつきで、**階段**を下りるとまっすぐに**改札口**へ向かっていたのは、**達夫**でありました。お母さんは見ると走り寄りました。

「**達夫**、どうして、こんなにおそかったのだい。」

「おそくとも、**心配**しないでいいといったのに。」

「でも、もう十一時過ぎじゃないか。」

「お母さん、僕、**夜業**をしてきたんだよ。」

「まあ、**夜まで働いて**は、おまえの**体**にさわるでしょう。」

**母と子**は、**話しながら**、とつくに**店**を閉めてしまつて、**暗**くなった、**町の通り**を歩いていきました。

「お母さんは、おまえ**一人**が、**頼り**なんだよ。おまえのからだは、**大事**なんだからね。」

「だいじょうぶですよ、お母さん。そう**心配**するなら、**明日**から早く帰ります。」

「ああ、どうか、そうしておくれ。」

お母<sup>かあ</sup>さんは、くらがりで、息子<sup>むすこ</sup>に気<sup>き</sup>づかれないうように、そつと涙<sup>なみだ</sup>をふきました。

# 青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 12」講談社

1977（昭和52）年10月10日第1刷発行

1982（昭和57）年9月10日第5刷発行

底本の親本：「夜の進軍喇叭」アルス

1940（昭和15）年4月

※表題は底本では、「夕焼《ゆうや》けがうすれて」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2017年8月25日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.azora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 夕焼けがうすれて

小川未明

2020年 7月18日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>